

# 大地

第 56 号  
2018. 1. 20. 発行  
浄 國 寺  
上越市寺町3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 【俳句】

山崎 睦

それぞれに蚊<sup>か</sup>やりを腰に草を取る

戸障子<sup>としょうじ</sup>をはづして盆の齋座<sup>さいざ</sup>かな

測量のポールにからみ葛<sup>くず</sup>の花

襲<sup>おそ</sup>ひ来る霜<sup>はるな</sup>榛<sup>はるな</sup>名湖<sup>なこ</sup>の面走る

秋日<sup>あきびより</sup>和盲導犬に道まかせ

本山に着<sup>たかぶ</sup>きし昂<sup>くさもみじ</sup>り草紅葉

句集『朝の光』より

平成五〜六年

## イチ、ニイ、サン、よん

山崎隆史

『鬼平犯科帳』などで有名な池波正太郎さんの小説では、「重箱」にわざわざ「かさねばこ」という振り仮名が振ってあります。現在では「重箱」を「ジュウバコ」と読むのが一般的ですが、本来は「かさねばこ」と読んでいたので、池波さんはあえて「かさねばこ」と振り仮名を振っているのです。

熟語（複数の漢字からなる単語）の読み方は、すべての漢字を音読みするか、すべての漢字を訓読みするか、いずれかを原則とします。音読みというのは、中国の読み方を取り入れた読み方で、漢和辞典などではカタカナで表記します。訓読みというのは、漢字に昔からの日本の言葉の音を当てたもので、漢和辞典などではひらがなで表記します。

この原則から外れ、音読みと訓読みを混ぜた読み方を「ジュウバこよみ」（重箱読み）または「ゆトウよみ」（湯桶読み）と言います。が、「重箱」を「ジュウバこ」と読むのが当たり前になってしまったため、「重箱読み」ばかり有名になって「湯桶読み」はあまり使われないようになってしまいました。

さて、数字を一から十まで数えるとき、ほとんどの人は、「イチ、ニイ、サン、よん、

ゴオ、ロク、なな、ハチ、キュウ、ジュウ」と言うのではないでしょうか。人によっては「よん」ではなく「シイ」とよむかも知れませんが。「四」と「七」の音読みは「シ」と「チ」で、ふたつで似ていて聞き分けしづらいいし、大きな声で発音しづらいいし、という事で、訓読みの「よん」と「なな」を使う場合が多いと思います。もっとも、これも場合によりけりで、例えば赤穂浪士は「シジュウシチシ（四十七士）」です。

仏教は中国から輸入された文化という事もあり、ほとんどの言葉を音読みで読みます。本来は、「初七日」は「シヨシチニチ」と読みますし、「七回忌」は「シチカイキ」と読むのです。本職の僧侶ですら、言いやすい、区別しやすい「シヨなのか」「ななカイキ」と読むのが慣例ですが。

去る2011年に、真宗大谷派の本山、東本願寺で「親鸞聖人七百五十回御遠忌」が行われました。つい「ななヒヤクゴジュツカイ」と言ってしまうですが、「シチヒヤクゴジュツカイ」と言うのが正式です。

本山から遅れること7年、今年2018年に、真宗大谷派の高田教区の親鸞聖人七百五十回御遠忌（シチヒヤクゴジュツカイゴエンキ）が執り行われます。「ななヒヤクゴジュツカイ」と読んでも全く構わないので、ご都合があらうなら是非ご参加くださいませ。

## 雪

山崎 直子

朝の窓に見る庭が初めて白く覆われてから、早いもので二ヶ月半ほどが過ぎようとしています。今冬の初雪は十一月の半ば、嫁いできてからすぐのことでした。参道の両脇に植わる満天星の葉の上に對をなすように真っ白に降りかかるのを見ながら、結婚式の前に「今年は久しぶりに全体が真っ赤になつたよ」とお父さん、お母さんが嬉しそうにが教えて下さつたのを思い出していました。降り積もるままの石畳を歩いてみれば、思わず雪とぬかるみに足を取られて「長ぐつ早めに買っておけばよかつたかなあ」と反省もちらり。越してくる前に聞かされていた「高田の雪は重いですよ」の言葉を実感した初雪となりました。

本格的な降りだしも例年より早かつたようで、湿り気の多い雪を踏みつつ二〇一八年の年明け、同朋会の新年会、そして気づけばもう二月も目の前です。気軽に声をかけて下さる門信徒の皆さんの雰囲気の中で楽しくお話させて頂きながら、迎え入れようとして下さる周囲の方のお心遣いに感謝する毎日です。

お陰さまで少しずつながらも新しい生活に慣れて、街を歩く機会も増えました。車の

運転がいささか心許ない身としてはまずは歩いて確かめるのが一番、と右往左往しながらも寺町通りを進んで、高田駅の周りから本町へ抜けて大きな雁木通りに出ます。時間によつては学生さんも見かけますが、若い人たちが寒そうにしながらもどこか薄着に見えるのは、ごうごうと鳴る風の音に首をすくめて歩く大人の所在なさゆえでしょうか。盆地で生まれ育つた身には平野に吹く冬の風は嵐とも思えるほどですが、土地の方にとつては「こんなものですよ」とのこと。ならばいつかは慣れるものかと、風ともにもやってくる雪おろしの雷の大音量にまたびくりとする頭の上を、低い雲が流れていきます。

まわりの全部が冷たかつた。ここから見える風景の全体、この地域にあるものすべてが雪の温度になつて、冷たさは均等にゆきわたつていた。

(中略)

音もなく限りなく降ってくる雪を見ているうちに、雪が降ってくるのではないことに気付いた。その知覚は一瞬にして多くの意識を捉えた。目の前で何かが輝いたように、ぼくははつとした。

雪が降るのではない。雪片に満たされた宇宙を、ぼくを乗せたこの世界の方が上へ上へと昇っているのだ。静かに、滑らかに、着実に、世界は上昇を続けていた。

「ステイル・ライフ」より  
(池澤夏樹著・中央公論新社刊)

北海道出身だという作家の雪についての描写はしんと降る、大寒の季節を思い出させます。新潟に嫁いできたことを知る東京近郊の友人は、信越線立ち往生の二三ノスを見てメールをくれました。こちらからも先日の首都圏の雪を心配すれば、やはり大都市ゆえの脆さを嘆き、翌日の出勤の手立てに頭を悩ませつつも、「雪は困るし寒さにもめつきり弱くなつたけど、この時期が一番地元を思い出すよ」と彼女は言います。大学進学、就職と、帰省する日が年々減つても、真っ白な風景がふいに懐かしいと。

毎年巡りくる冬のもたらす、厄介でままならず、恐ろしく、手強いもの。人の力を、備えを試し、時にあつさりそれを跳ね除けていくもの。けれどだからこそ、記憶に残すイメージは強烈なのかもしれません。薄着に見えた雁木通りの学生さんたちも、いつか遠い街で冬の嵐を思い出すことがあるでしょうか。それを懐かしいと、思うこともあるでしょうか。

ほんやり歩いて飛び出す消雪パイプを避けそこね、横を通る車の水を足元にかぶる。いつもの失敗を繰り返しながら、初めての高田での冬が過ぎていきます。

# 大病することもなく

北本町3 横関レイ子

先日、私が所属する協会の初代会長であったI氏が亡くなられた。享年九十五。お通夜の席で喪主を務められた奥様がまず初めに、「主人は大病することもなく、入院することもなく、お話をされた。お元気な方と思っ

てはいたが、そうだったのかと改めて驚かされた。晩年は施設に入所されていたとはいえず（それも胃ガンの手術をされた奥様のお身体を氣遣って、自ら入所を決められたという）戦争に行き外国での捕虜体験もある方である。一世紀近い人生、これまで大変なことが多々あったであろうが、それでも丈夫で長生きできたということは、少なくともそれだけでも幸せであったと言えるのではなからうか。

七年前に九十四歳で亡くなった私の姑もまた、小柄ではあるが丈夫でやはり大病をしたことのない人であった。しかし、八十八歳の時に右脚を骨折し、生まれて初めて入院せざるを得ない状況になった。そのため一人暮らしをしていた姑を柏崎市から高田に連れてきたが、当節片脚の骨折ぐらいでは受け入れてくれる病院はどこにもないという現実を、姑は知る由もなかった。それでもやっとの思いで何とか入院させてもらえたというのに、たっ

た二晩でその病院を追い出されることになったとき、私は泣いた。

なぜそんなことになったかというところ、九十近い老女であるはずの姑が夜中に男に襲われると思ひ込み、肌掛け布団をかぶり病院中を飛び回るといふ騒動を起こしたからである。骨折した脚にはギブスがはめられ、本来なら歩くこともままならなかったはずなのに――姑の場合、それまで一度も入院経験がなかったことがかえって仇になった。急激な環境の変化にパニックを起こし、一気にアルツハイマー型認知症の症状が吹き出たのであった。

同じ協会の会員であったEさんもすでに故人になられたが、二十年ほど前に知り合った頃、虫歯が一本もないという話をされたことがある。彼女は私より二十くらい年上だから、当時でもゆうに六十歳は超えていたと思う。

今度生まれ変わる時は、虫歯のない人生を送りたいと切に願っている私からすると、Eさんの健全なる歯は実に羨ましい限りであった。しかし、ある時彼女と隣り合わせの席に座ったことがあるのだが、いくら私が話しかけても一言も返事をしてくれず全く知らんぷりなのである。当初Eさんは私のことが嫌いなのかと思ったりもしたが、そうではなくてただ単に片方の耳が悪くよく聞こえないだけなのだということを知らされた。

Eさんは、その頃から膝も痛いといって、

畳の上には座ることができず椅子に腰掛けていたと思う。晩年はさらに足腰が弱り歩くこともままならず、お風呂に入れてもらうために週二回デイサービスに行っているのだと、ご主人に話を聞いたことがある。

I氏や姑のように病氣らしい病氣をすることもなく、九十まで元気に過ごせる人もいる。片やEさんのように、虫歯は一本もなくとも耳や膝に障害があった人もいる。神様は一体どういう基準で我々の肉体を作り上げるのだろうか、Eさんの遺影を見つめながら、私は胸の中で考え込んでしまっているのであった。

通夜ふるまいの席でも、I氏が頑健な人であったことが話題になった。出席していた協会のメンバーはみなすでにシニア世代であるから、自ずとあそこが悪い、ここが痛いという病氣の話で盛り上がる結果になってしまう。それでも最後に、I氏があれほど熱心に活動できたのも、あれだけ大きな業績を残すことができたのも、ひとえに丈夫な身体であったことが大きな要因であると、みんなの意見は一致したのであった。そして、残された我々は、これからも老骨にムチ打って頑張って活動を続けていかなければならないのだ、と思った次第である。



# 身に受くる

山崎武雄

物を受くるに 心を以てし  
法を受くるに 身を以てす

金子大栄師の言葉

先日、訓覇師の講義の中で教えて頂いたのですが、ひたすら道を求めて放浪の旅を続けられた俳人尾崎放哉さんに、次の様な句があるとのことでした。

入れものが無い両手で受ける

頂いたものは両手でいただいてお受けしなければ、下さった方の有難い心持ちも、品物の有難さ勿体なさも判らぬのではないのでしょうか。

今、私共の生活は豊かに(?)になりましたが、大人も子供も物を受くるに 心を以てする事が失われて行く時、味気無さ、虚しさのみ残ります。

本屋さんのお話ですと、生活こそ豊かになつたが、心の寂しさ、虚しさを癒す為か、今は一寸した宗教書ブームが起っているとの事です。沢山の宗教書、名僧知識の録音テープを、居ながらにして容易に手にして読み、且つ聴く事が出来ます。

だが果たして宗教、なかんずく、仏法は興

隆し、世の救いとなっているでしょうか。頭をかきぎるを得ません。真実の法はそんなにはたやすくわかるものではありません。それでは絶対にわからぬものでしょうか。

五智国府に配流された親鸞が説かれた念仏の教えが、どうして僅かの間にあれほど弘まったのでしょうか。

親鸞は僧とは申すものの都の人であり、貴族の出の方であります。聞法する者は、農民、漁民、職人、商人等、所詮当時の下層の庶民で、文字を読める人も少なく、習慣も言葉も相通じる訳はないのです。わかる訳はないのです。

わからぬ訳はないと、確固たる信念をもって説かれた親鸞の言動が、愚かな、業深きこの身も仏の御本願により救われると、身を投げ出して聴く人等に岩に水しみ入る如く受け入れられ、感じられ、弘まっていたのです。全く不思議な事の様ですが、感応道交とはこの事ではないでしょうか。

厳しい越後の自然、苦しい労働に耐え、強健な身体となられ、皆に法をわかってもらえた喜びをもたれた親鸞は、自信教人信を胸にそれより関東の新天地におもむかれます。ここでも庶民の中に入って真実の法を説き、忽ち、高田、下妻、横曾根、鹿島など、一説には数十万を超す門徒、後年の関東教団の素地を作られます。

光いよいよ強くして 闇いよいよ深く  
闇いよいよ深くして 光いよいよ強し  
ひとりひとりが、無碍光の中にあることを知れば知る程、自己の愚かさ、業の深さを自覚し、自己に目覚めたる人は、仏の光明の強さを身をもって感ずるのです。  
身に感じる聞法の喜び、有難さ、これだけはほんものでないでしょうか。

※長男の結婚に合わせ庫裡の改修工事が行われました。ために持ち物、書籍、書類等の整理に汗だくの作業。作業の途中、父の遺した文が幾つか出て来ました。『身に受くる』もその一つです。最晩年七十歳のころに書かれたものと思われまます。ガンで声帯を摘出、食事のままならぬ状態ながら、穏やかに、聞法にいそしむ日々でした。  
享年七十一歳。 (隆昌記)

## 第16回川島昭恵「語り」と「お話」の会

日時 5月26日 土曜 午後4時より  
場所 浄國寺 本堂

内容 川島昭恵さんによる素敵な童話の「語り」と心に暖かく響く「お話」

※昨年は都合によりお休みしましたが、本年は実行致します。お楽しみに  
初夏の夕べ素敵な時を共にしましょう

# 生命のつながり

山崎隆昌

この度、不思議なご縁で長男が結婚することになった。

結婚式を浄國寺本堂で行うこと、新しい家族を迎えることを機に、本堂の一部と庫裡の奥二部屋そして二階部分を全面的に改修することにし、いま畳の表替えも併せて改修工事が進められている。

現存の庫裡が新築されたのは昭和五十四年七月、三十八年前のこと。

その前の古い庫裡は、大正四年五月十六日に発生した寺町の大火の際に焼失し、再建されたもので、父武雄が五歳、母睦誕生の年だ。当時の浄國寺本堂は、総樫造り茅葺屋根で随分高かったという。その日はフェーン現象で猛烈な南風が吹き荒れ、火の粉が真横に走り飛散し、火元から遠く離れた浄國寺だが、早くに茅葺屋根に飛び火し類焼したという。

ご門徒のご苦労により、庫裡は旧民家を解体移築しようやく再建できたが、本堂の再建まではとても適わず、取り敢えず火事の跡に急遽建てた仮御堂をそのまま補強工事で直した。仮御堂も民家を移築したもので、ために本堂にも関わらず、柱は円柱でなく四寸五分の角柱である。百年以上前のことだ。

六十四年経過した昭和五十四年三月、建て替えるため古い庫裡が壊された。大型重機により次々と壊し潰されて行く庫裡の様子を、ガンで声を失った父はじっと見続けていた。「寒いから」と声を掛けても動こうとしない。そのうち涙でほほを濡らし始めた父の姿に、いたたまれずその場を離れた。

建て替えられた庫裡には父母の部屋が設けられた。本当の意味で両親が「自分の部屋」を持つのは結婚以来初めてのことだろう。

工事が順調に進められている中、母が突然「自分達の部屋には押入れがない。絶対作ってほしい」と言い出した。工事も中盤で、間取りの変更は難しいことを説明しても頑として聞かない。父の説得も効果なし。とうとう隣室に突き出すように押入れは作られた。

結婚以来四十年余りにして初めて持つ自分の部屋に「押入れがほしい」という当時の母の気持ち、今にして何か響いてくる。

工事は七月無事完工、荷物、道具も運び終え、全てが新しい庫裡での生活が始まった。

父は朝が早い。薄暗いうちから起き出して、本堂にお参りの後、家中の戸を開けていく。

まだい草の香りが強く残る畳を何度も静かに撫で、柱や建具に触れ「ホウ、ホウ」と聞こえぬほどの小さな声無き声を発し、嬉しい気持ちを確認している。毎朝のことで、その姿は子供のようだった。

現在のリフォーム工事も計画通りに進められ、いよいよ終わりに近づきつつある。

いましみじみ思うことは、私をここに立たせてくれている不思議なつながりである。

本年五月、母の七回忌の法要をお勤めした。六月には、大阪に住む次男夫婦に第二子が誕生した。元気な男の子、可愛いものだ。

そして十一月にはご縁を得て長男が結婚する。そこには、父も母もいない。存命ならば、二人は百七歳と百二歳だ。生きていればどんなに喜んだことだろう。

人は自らの意志を超えたつながりの中で、様々な出来事に出会う。辛いこと、苦しいこと、楽しいこと、悲しいこと、嬉しいこと、どれもそれぞれが不思議なご縁だ。

父母のこと、次男夫婦の子供の誕生、長男の結婚、そして庫裡の改修工事などの出来事を通して、改めて自分の中に流れる生命のつながりを感じている。

※本原稿は昨秋九月に記したものです

戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが、戦争を知らない世代が政治の中枢になったときはとても危ない。

田中角栄 述

何処かの国の首相に聞かせたい

# ワン公物語①⑥

華のつぶやき

山崎 華(慎子代筆)

私は華。パグ犬の雌。もうじき十一才になる。来年は十二才で年女。つまり私は亥年のワン公。でも犬には干支はないんだって。こういう時私は否応なしに、自分が人間ではないのだと思いらされる。マ・イイか!

去年、山崎さん家は何かへんだった。

見知らぬ人が入れ替わり立ち替わり出入りしては、カンカン、ギコギコ色んな音を出し家を振動させ、時にはいつもと違う匂いも漂ったり。揚げ句私は、いつも増して父さん母さんに遊んで貰えない日が続いた。

母さん達はゴハンをくれることは忘れなかったし、部屋の掃除もしてくれてはいたんだけど、気持ちはいつも別の所に向いているみただった。これは死活問題につながるのではと危ぶんだ。ゴハンだけは確保せねばと思った私は、食事の度に声をあげた。「ゴハン、ゴハン!」「ゴハン、ゴハン、ゴハン!」それまで滅多に声を出さない私がそんな作戦に出た気持ちを測りかねて、母さん達は首を傾げた。「華は少し年をとっちゃったのかしら」春が過ぎ夏が過ぎ、家中がバタバタとせわしない感じで、私はひとり溜め息をつく日々が続いた。行く末が不安になってもいた。

そんなある日、大好きな昌子姉さんが帰って来た!いつもなら、ひとしきり私と遊んでくれる昌子姉さんがやっぱり忙しそうにしている。そのうち奇麗な着物なんか着て、行ったり来たり、私の前を素通りするだけなのだ。ようやく半年以上の落ち着かない日々が終わったようだったが、高揚した雰囲気は続いていた。そ知らぬ顔をしていても私はこれも結構、繊細で敏感なのだ。

それまで時々見かけていた、若くて可愛い女の子が、いつも家の中に居るようになった。その人は隆史兄さんのお嫁さん・直子さんだった。私は戸惑った。仁義なんてヤクザなことは言わないけど、先住犬に挨拶くらいあっても良いんじゃないかな?と思っていた。だから私は犬らしいやり方でそれを主張してみた。たまに同席させてもらう台所で、二度、三度シャーッとやっちゃったのだ。父さんと母さんは慌てた。この子ボケちゃったのかしら、それとも厭がらせ?早速、獣医さんに相談したところ「それはテリトリーへの侵入者(直子さん)ゴメンナサイ)に対するいわば警告です。本能ですからね。今のうち関係を作らないと大変なことになりますよ」

帰宅した母さんからその話を聞いて、皆が私に気を使うようになってくれた。直子さんは、華ちゃんはお父さんとお母さんのモノ!と、私に手を出してはいけないと遠慮

していたんだって。母さんは加齢臭のきつくなってきた私を直子さんが嫌いになってはいけないと考え過ぎて判断を間違えたのだ。つまりは、お互いの思いがスレ違っていたことが判って、直子さんは早速私にゴハンをくれたり、世話をしてくれるようになった。直子さんの声は、とても優しい。「華ちゃん」と呼んでくれる時も、ほあーんとして素敵。私はすぐに直子さんのことが大好きになった。

私は思う。これはあれだな。つまり難しく言えば「和顔愛語」ってことだな。

穏やかなやさしい顔で、愛情のこもった言葉で話しかければ、どんな人でも、気持ちも顔つきも、穏やかになるって言う、昔から言われていること。もう少し言うかね、古いお経に書いてあるんだよ。これでも私は門前のワン小僧なんだから。

母さんが今日も叱る。「華、脅迫的にゴハン、ゴハン!て叫ぶのはやめてね」

そういう時の母さんは、声も顔も決して優しくなんかないんだな。マ・イイか!

(以下 次号)

